

アフタヌーンティーの役割

—V・ウルフ『夜と昼』—考察—

太田素子

要旨

ヴァージニア・ウルフの中期円熟期の小説においては、パーティが重要な役割を果たしているが、彼女の長編第二作である『夜と昼』ではアフタヌーンティーが重要な役割を果たしている。紅茶は、17世紀にもたらされやがて一般大衆にまで消費が拡大するが、終始、アフタヌーンティーの名のもとに、中、上流階級のステイタスシンボルであり続け、イングリッシュネスとも関わっている。本論は、アフタヌーンティーの視点から、『夜と昼』のキャサリンとレイフの関係を読み直す試みである。

キーワード：アフタヌーンティー、イングリッシュネス、帝国、ヴァージニア・ウルフ、『夜と昼』

はじめに

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) の長編第二作である『夜と昼』 (*Night and Day*) (1919) には、アフタヌーンティーが効果的に用いられている。イギリス人は紅茶を好むと一般に言われているが、その歴史はそれほど古くはない。紅茶がイングランドに登場するのは17世紀中頃で、チャールズⅡ世の王妃でポルトガルから嫁いできたキャサリンがイングランド宮廷にもたらしたとされる。しかし、コーヒーハウスが次々と開店するのに対して、イングランドで紅茶の消費が一般化し、コーヒーハウスがコーヒーよりも紅茶を出すようになったのは、18世紀はじめと言われる。そして、この頃より、イギリス人の紅茶愛好はスタートするのである。しかし、当時、紅茶は高価なぜいたく品であり、同様に貴重品であった砂糖を入れて喫むという、原産地アジアにはない、独

特の消費の方法は、典型的な王侯貴族のステイタス・シンボルとなっていた。

紅茶愛好をさらに加速させたのは、大英帝国のヨーロッパ外世界への植民地拡大であった。大英帝国が、東インド会社の活動を盛んにして茶の輸入を激増させ、三角貿易により、カリブ海の島々で砂糖きびプランテーションを展開するようになってはじめて、砂糖を入れた紅茶は、中流階級も消費するものになり、さらに、19世紀以降、労働者階級にも紅茶消費は拡大していく。東西のプランテーションからの紅茶と砂糖の大量供給が、工場労働者にまで消費を拡大し、彼らが労働の合間にカフェインと糖分の補給によって、労働の効率をあげ、又台所がなくても簡単にとれる夕食であるハイティーを可能にした。その一方で、ステイタス・シンボルとしての紅茶は、アフタヌーンティーという形で、中、上流階級に、広く受け入れられて、階級のシンボリック役割を果たすようになる。¹⁾

帝国と階級と切り離せないアフタヌーンティーという伝統は又、イングリッシュネス²⁾という言葉とも深く関わってくる。イングリッシュネスという言葉は、18世紀後半から使われるようになり、帝国の時代³⁾と深く関わる言葉である。一般に「イングランド性」とも言われ、「イングランドらしさ」あるいは「イングランドらしいもの」を意味し、国外に向けては、連合王国と呼ばれる「国家」である英国の文化的特徴を表現する語として用いられる。そして、この語は、文字通り英国のなかのマジョリティーであるイングランドを代表する表現という側面を持つ。社会的上位にある集団と社会的な従属集団という関係を生み出すイングリッシュネスという言葉は、政治経済とは一見関係のない文化表象に用いられてきた。これは、上流階級というまさにマジョリティーの文化からはじまったアフタヌーンティーとも、深い関わりを持つ言葉である。アフタヌーンティーは、集まりのホステスである女性を中心に華やかに繰り広げられる社交として、成人男子がマジョリティーである社会において、きわめて女性性に依存した文化形態と言う側面も併せ持って、帝国の時代におけるイングリッシュネスの拡大にも寄与するのである。

このような18世紀から19世紀に繰り広げられるアフタヌーンティーの伝統は、ヴァージニア・ウルフの描いた『夜と昼』(1919)で重要な役割を果たしている。19世紀末から第一次大戦前後のイギリス社会では、国民意識と帝国意識は不可分に結ばれ、階級やジェンダーの壁を越えて、イギリス人の愛国心、ナショナリズムが最も昂揚した時期、そして、イングリッシュネスという言葉が意識された時代でもあった。本論では、『夜と昼』で描かれている幾つかの茶会の中から、1. 紳士階級で知的エリートでもあるヒルベリー家 (the Hilberies) のアフタヌーンティー、2. 同じく紳士階級の村の牧師の娘で現在は婦人参政権運動家メアリ (Mary Duchet) の主として事務所でのお茶、3. 同じ中流でありながら、紳士階級からははずれているデナム家 (the Denhams) のお茶

の3つをとりあげて、同じ中流階級の中で微妙な差異とせめぎあいをひきおこす、アフタヌーンティーの視点から、キャサリン (Katherine Hilbery) とレイフ (Ralph Denham)、さらにはメアリとの関係を明らかにしていきたい。

1. ヒルベリー家の茶会

まず、女主人公キャサリン・ヒルベリーの家であり、紳士階級で知的エリートでもあるヒルベリー家のアフタヌーンティーについて考える。『夜と昼』はキャサリンが客間で人々にお茶をいれている場面から始まる。

It was a Sunday evening in October, and in common with many other young ladies of her class, Katharine Hilbery was pouring out tea. Perhaps a fifth part of her mind was thus occupied, and the remaining parts leapt over the little barrier of day which interposed between Monday morning and this rather subdued moment, and played with the things one does voluntarily and normally in the daylight. But although she was silent, she was evidently mistress of a situation which was familiar enough to her, and inclined to let it take its way for the six hundredth time, perhaps, without bringing into play any of her unoccupied faculties. (1)

夕方とあるからには、これは五時頃からはじまるアフタヌーンティーと考えられる。「同じ階級の令嬢たち」と、無意識の階級意識も示されている。キャサリンは、文学者で評論誌の編集者である父と、ヴィクトリア朝時代の大詩人の娘で情緒過多で気まぐれな母との間に生まれた一人娘という恵まれた家庭の出であり、母を助けてお茶を注ぐ役割を、「かなり気の重いひととき」と感じつつも、「じゅうぶん慣れた感じで」(familiar enough) 心の5分の1を傾けるだけで、果たしているのである。アフタヌーンティーは彼女がいささかうんざりしつつも、手慣れたやり方で進めていける、まさに日常世界そのものであった。

この茶会に、突然訪れて来るのが、その後、キャサリンが心惹かれていくレイフ・デナムという青年である。貧乏な大家族の長男で姉と二人で一家の生活や弟妹の教育を支えている。専門学校を出て現在リンカーンインフィールドズの法律事務所の下級弁護士であるが、紳士階級には属さない。キャサリンの父の評論誌に法律関係の論文を寄稿した縁でヒルベリー家のお茶に招かれたのである。

Katharine stirred her tea, and seemed to speculate, so Denham thought, upon the duty of filling somebody else's cup, but she was really wondering how she was going to

keep this strange young man in harmony with the rest. She observed that he was compressing his teacup, so that there was danger lest the thin china might cave inwards. She could see that he was nervous; one would expect a bony young man with his face slightly reddened by the wind, and his hair not altogether smooth, to be nervous in such a party. Further, he probably disliked this kind of thing, and had come out of curiosity, or because her father had invited him—anyhow, he would not be easily combined with the rest. (3)

彼女が茶会を“familiar”と感じ、楽々となしているのに対し、レイフは、「神経質に」(nervous) になっており、紳士階級の特権階級的の社交である、こういう茶会を「嫌って」(dislike) いるように見える。ヒルベリー家で行われている茶会に対して、二人はまさに正反対の態度であると言える。自分の家の茶会で、神経質になって楽しめないでいる初対面のレイフを、キャサリンは気遣うが、ここではまだ、それは自分の家の茶会を円滑に進行しようというホステスとしての気配りにすぎない。階級差は依然として存在し、キャサリンは自分の家庭環境へのレイフの敵意すら感じて、彼につい意地の悪い態度を示すことになる。茶会は二人の階級差を浮き彫りにし、二人の関係を象徴する。さらには、茶会を通して、キャサリンの家族を誇りに思う気持ちと、誇りには思えないレイフの気持ち⁴⁾が対照的に描かれる。ヒルベリー家の茶会は、行き届いたお茶の接待と、人々を結びつけ、知的活気と共に、和やかな団欒を生み出す社交的会話からなる、洗練されたものであった。しかし、中流ではあるがヒルベリー家のような紳士階級には属さないレイフにとっては、自分より社会的に上位にある集団を象徴するヒルベリー家の茶会は、階級差を如実に感じさせる集いであった。「彼はたぶんこういうことが好きではないのだ」と、このときは簡単に考えてしまうキャサリンであるが、実はレイフのこの居心地の悪さは、彼の階級意識に根ざして、後に惹かれ合うことになる二人の関係に影を落とす。そして、この居心地の悪さの解消という問題は、小説後半で彼の家であるデナム家の、やはり茶会を通してもう一度取り上げられている。キャサリンとレイフの関係にアフタヌーンティーは重要な役割を果たしているが、特に冒頭のヒルベリー家の茶会は、後の展開の伏線としての役割を果たしているのである。

2. メアリの事務所でのお茶

次に、婦人参政権運動家である、メアリ・ダレットの、主として事務所でのお茶について考える。メアリはイングランド中東部の村の牧師の次女である。体力と決断力に恵まれ、強いプライドの持ち主で、半年前からロンドンに出て婦人参政権運動を推進する協会の事務所で彼女も運動に挺身している。レイフとは社会活動を通じて知り合い、

彼を愛している。この彼女のお茶は、自宅ではなく事務所内で、会議の合間に次のように行われる。

“Let’s have our tea,” she said, ... “It was a good meeting—didn’t you think so, Sally?” she let fall, casually, as she sat down at the table.

.....

They had their tea, and went over many of the points that had been raised in the committee rather more intimately than had been possible then; and they all felt an agreeable sense of being in some way behind the scenes; of having their hands upon strings which, when pulled, would completely change the pageant exhibited daily to those who read the newspapers. Although their views were very different, this sense united them and made them almost cordial in their manners to each other. (176-7)

事務所で行われた委員会で、運動に対する熱心な議論の後、他の委員が出て行った後も、シール女史とメアリが残り、女性二人で、お茶を飲みながら、委員会の議論の続きが行われる。このお茶は、ヒルベリー家のお茶とは異なっている。社交と会話のために集まるヒルベリー家の茶会に対し、仕事の議論の続きに没頭する彼女たちのお茶は、伝統的な中産階級のアフタヌーンティーと言うより、単にカフェインを補給して仕事の疲れを解消する簡単で事務的なティーブレイクである。しかし、同時に、仕事の厳しさや、高揚感とは違う、ある暖かい雰囲気漂っていると語られる。この「暖かさ」(cordial)は、いわゆるアフタヌーンティーと全く違った設定であるメアリの事務所のお茶に、アフタヌーンティーの基本である社交の、儀礼を取り除いた真の意味でのコミュニケーションの部分、付与していると言える。そして、メアリはこの事務所でのお茶を伝統的なアフタヌーンティーの精神へとつなぐ役割を担っているのである。

このような、事務所でのメアリのお茶に、キャサリンが参加するとどうなるか。散歩中のキャサリンが急に思い立ってお茶の時間にメアリの事務所を訪れる場面は、次のように描かれている。

“You !” she exclaimed. “We thought you were the printer....Well, this is a surprise. Come in,” she added. “You’re just in time for tea.”

.....

Katharine wondered, as she stood there, feeling, for the moment, entirely detached and unabsorbed, why she had come. She looked, indeed, to Mary’s eyes strangely out of place in the office. (82-3)

キャサリンを印刷屋と間違える、事務所独特の仕事第一の雰囲気の中で、驚きながらもメアリはキャサリンをお茶に招じ入れる。キャサリンが「事務所には場違い」(out of place in the office)の存在であることは、彼女もメアリも肌で感じ取っている。しかし、この事務所のお茶がキャサリンに与える、自分が場違いであるという印象は、いたたまれない思い、二度と体験したくないほどの違和感をともなうわけではない。このことは、キャサリンがその後、再び今度は自宅にはあるがメアリをお茶の時間に訪ねる気持ちになることから明らかである。

メアリの部屋を、通りすがりに訪ねて「メアリ、お茶をいただけませんかしら？」とためらいがちに聞くキャサリンであるが、メアリが気づくと、キャサリンは客でありながら、自然にお茶をいれる側にまわっていた。

Katharine might have been seated in her own drawing-room, controlling a situation which presented no sort of difficulty to her trained mind. Rather to her surprise, Mary found herself making conversation with William about old Italian pictures, while Katharine poured out tea, cut cake, kept William's plate supplied, without joining more than was necessary in the conversation. She seemed to have taken possession of Mary's room, and to handle the cups as if they belonged to her. But it was done so naturally that it bred no resentment in Mary; (180-181)

キャサリンがお茶をそそぐ役割を引き受ける、この場面は、まさにヒルベリー一家のアフタヌーンティーの描写を再現する。レイフはキャサリンの家の茶会に違和感を抱くが、婦人参政権運動家であるはずのメアリは、本来自分がつぐべきお茶をキャサリンが注いでいることに別に違和感を感じていない。婦人参政権運動家、社会的な従属集団の側に立つメアリの事務所、そしてそこで行われるお茶は、社会的上位にある集団に属するキャサリンにとって当然違和感を感じさせるものでありながら、その違和感は決定的なものではない。社会活動家ではあるが本来紳士階級に属する牧師の娘、メアリの柔軟な考え方がある種の居心地の良さをもたらすことで、本来せめぎ合うはずの、両者の境界の越境の可能性が、このメアリのお茶に示唆されるのである。

3. デナム家の茶会

さらに、紳士階級に属さないデナム家の茶会について考える。キャサリンの属する紳士階級には属さず、社会的な上位集団にいる彼女と比べると社会的な従属集団の一員であり、そのことに劣等感を抱いているレイフの、階級差意識を解消する可能性を、彼の家であるデナム家の茶会への、キャサリンの参加の場面からさぐっていきたい。二人が

互いにひかれあっていることを自覚する作品の後半部分で、キャサリンと散策しながら、レイフは彼女にひかれていく気持を抑えられない。しかも、小説の冒頭場面のヒルベリー家の茶会以来、自分とキャサリンの階級差を強く意識するレイフは、お茶についての「大胆な計画」(a daring plan)を思いつく。自分の家のお茶に招待し、明らかな階級差に幻滅した彼女の態度を見て、そんな彼女に失望し、彼女とは住む世界が違うという理由で彼女への思いを断とうという、どちらかといえば受身的な計画であった。彼女を試すことになるこの計画に対して、彼女に「つらく当たっている」という意識を持ちながらも、彼はあえて実行に移すのである。

In his surprise at the suddenness of the change, and at the extent of his freedom, he bethought him of a daring plan, by which the ghost of Katharine could be more effectually exorcised than by mere abstinence. He would ask her to come home with him to tea. He would force her through the mill of family life; he would place her in a light unsparing and revealing. His family would find nothing to admire in her, and she, he felt certain, would despise them all, and this, too, would help him. He felt himself becoming more and more merciless towards her. By such courageous measures any one, he thought, could end the absurd passions which were the cause of so much pain and waste. (394)

ヒルベリー家の、客をくつろがせ、居心地よくさせることを第一とする伝統は、デナム家にはない。出されたケーキは大きすぎて会話の邪魔になり、又、レイフの母のデナム夫人は、息子の連れてきた女性を、好奇心を隠そうともせずにおしつけに見つめ、キャサリンに居心地の悪い思いをさせる。このようなデナム家のお茶の客となったキャサリンは「極度の恥ずかしさで固くなった。」(The rigidity of extreme shyness came over her. 395)と描かれる。レイフの家族と、そしてレイフ自身の、批判的なまなざしは、会話を停滞させ、彼女の居心地の悪さはピークに達する。

Owing, perhaps, to this critical glance, Katharine decided that Ralph Denham's family was commonplace, unshapely, lacking in charm, and fitly expressed by the hideous nature of their furniture and decorations. ...She did not apply her judgment consciously to Ralph, but when she looked at him, a moment later, she rated him lower than at any other time of their acquaintanceship. (398)

デナム家のお茶は彼女にとって、これまで慣れ親しんだお茶と社交の技術でははかれな

い、そして彼女の手慣れたお茶のマナーとはまるでふさわしくない体験で、彼女はデナム夫人に対する“the verge of rudeness” (399) に追い込まれる。ここまではまさにレイフの思い通りの展開であった。

Next moment, a silence, sudden and complete, descended upon them all. The silence of all these people round the untidy table was enormous and hideous;...A second later the door opened and there was a stir of relief; (399)

この気まずい沈黙を救ったのは、レイフの姉のジョーン (Joan) である。彼女が部屋に入ってくると、彼女の自然な会話から、コミュニケーションへの試みがはじまる。デナム夫人のぶしつけな好奇心、レイフのキャサリンを試す試み、キャサリンの違和感、緊張感、趣味の悪さに辟易とする気持ちが、お茶の会話を停滞させ、そんな中で、誰もコミュニケーションへの試みをしなかったために、気まずい沈黙が支配する。ジョーンの自然な会話は、たくまずして社交の原点としての、会話を円滑に復活させる。メアリの場合と同様、ジョーンの柔軟な態度とコミュニケーションの試みが、本来階級差から生まれる場違いな感覚を緩和しているのである。

ヴァージニア・ウルフの中期円熟期の小説では、パーティが重要な役割を担っている。⁵⁾そこでは、パーティの女主人が、社交を通してそこに参加する人々の間に、束の間の一体感を共有する「瞬間」を現出させる。パーティは同じ階級に属する人々の集まりという安心感が根底にある。ヒルベリー家のアフタヌーンティーにはそれがあるが、メアリのお茶、デナム家の茶会にはそれはない。その意味では、パーティより難しい状況にある。しかし、階級意識のせめぎあいがある基本に存在する茶会ではあっても、メアリのお茶では、メアリが、デナム家の茶会ではジョーンが、キャサリンに手をさしのべることで、社交の最も基本的形態であるコミュニケーションは成立しうるのである。なごやかに進行し出したお茶を楽しみ始めたキャサリンは、お茶の時間が過ぎても「帰りたくない」(she had no wish to go home) (403) と思う。

They appealed to her [i.e.Katherine], and she forgot her cake and began to laugh and talk and argue with sudden animation. The large family seemed to her so warm and various that she forgot to censure them for their taste in pottery. (400 - 401)

遂にレイフは、キャサリンを試す実験の失敗を認め、誇りをとりもどす。

“I tried to think so. But I thought you more wonderful than ever.”

.....

“I’ve done my best to see you as you are, without any of this damned romantic nonsense. That was why I asked you here, and it’s increased my folly. When you’re gone I shall look out of that window and think of you. I shall waste the whole evening thinking of you. I shall waste my whole life, I believe.” (403-4)

紳士階級であるヒルベリー家の伝統的なアフタヌーンティーを通してしかキャサリンを見ず、階級意識と劣等感にとらわれていたレイフは、今はじめて、ありのままのキャサリンを認めることを自分に許し、さらには自分の家族に対して本来もっていた誇りを取り戻している。お茶を通して明らかになった社会的上位集団と従属集団のせめぎ合いという意識にとらわれた二人はやはりお茶を通してようやくそこから解放される。キャサリンがメアリやジョーンの助けを得て社会的従属集団のお茶にも融け込み、そのようなキャサリンを見てレイフもありのままのキャサリンを見つめ直そうとする。この小説の最後の場面で、レイフは、遂に冒頭のヒルベリー家のアフタヌーンティーが自分にもたらず劣等感から解放される。そしてはじめて自らヒルベリー家を訪れて、外出しているキャサリンを待つ気持ちになる。イギリス伝統のアフタヌーンティーは、二人の男女の惹かれ合う気持ちに階級意識の枠をはめて試練を与えつつ、それを乗り越えることで、二人に愛を成就させる役割を果たすのである。そして、このことは二人がヴィジョンを共有⁶⁾していることを示唆するのである。

おわりに

『夜と昼』の描かれた20世紀初頭は又、イングリッシュネスにおける、社会的従属集団の変化の時期でもあった。18世紀には、社会的上位集団イングランドとせめぎあうのは、スコットランドやアイルランドであった。しかしやがて、従属集団は、マイノリティーとしての、女性や労働者階級に、そして、帝国の時代になって、植民地の存在へと、移行していく。その過程において、イングランド内の社会的従属集団は、上位集団に取り込まれていく。このような時期に書かれた『夜と昼』は、イングリッシュネスの表象の一つであるアフタヌーンティーを効果的に用いることによって、社会的上位集団と従属集団の階級の違いとせめぎ合いという視点を明確にしている。しかし、『夜と昼』は同時に、アフタヌーンティーを効果的に用いることで、二つの集団の和解をも示唆している。なぜなら、キャサリンとレイフの恋愛は、小説の最終場面において、階級意識を越えたヴィジョンの共有を果たすからである。そして、このようなヴィジョンの共有に至る過程に、アフタヌーンティーは重要な役割を果たしているのである。

注

Night and Day の引用は Hogarth Press の Uniform Edition による

1. cf., J-L・フランドラン/M・モンタナーリ編『食の歴史Ⅲ』（藤原書店、2006）
2. 井野瀬久美恵「イギリス的なるもの（Englishness）の捏造—「政策としての文化」再考（1880-1920）」田村 克己編『文化の生産』（ドメス出版、1999）
3. 1870年代後半から第一次大戦が勃発する1914年まで
4. cf., *Night and Day*
“You must be very proud of your family, Miss Hilbery.”
“Yes, I am,” Katharine answered, and she added, “Do you think there’s anything wrong in that?”
“Wrong? How should it be wrong? It must be a bore, though, showing your things to visitors,” he added reflectively.
“Not if the visitors like them.” (10)

“But aren’t you proud of your family?” Katharine demanded.
“No,” said Denham, “We’ve never done anything to be proud of—unless you count paying one’s bills a matter for pride.”
“That sounds rather dull,” Katharine remarked.
“You would think us horribly dull,” Denham agreed.
“Yes, I might find you dull, but I don’t think I should find you ridiculous,” Katharine added, as if Denham had actually brought that charge against her family.
“No—because we’re not in the least ridiculous. We’re respectable middle-class family, living at Highgate.”
“We don’t live at Highgate, but we’re middle class too, I suppose.” (11)
5. cf., 拙稿「ヴァージニア・ウルフのパーティ空間」藤井治彦編『空間と英米文学』（英宝社、1987）
6. cf., 拙稿「Ralph と riding hero—*Night and Day* 一考察」『大手前大学人文科学部論集第2号』（2002）